淡鋒資鋭 下

和書門
類
二七四六六號
一八九函
一〇架
二冊

内閣文庫
和書
類
二七四六六號
二冊
一四架
二一二函

内閣文庫
番號 和 27466
冊數 2 (2)
函號 212 230

国立公文書館
National Archives of Japan

談鋒資鋭卷之下

江戸　荒井繇行堯民著

山雞は己の羽毛を愛し。水に映じて舞。犀牛は己の影を恶しと思ひ。水に照し見ることを欲せず常に濁水を飲む。物性の相反することかくの如し。羽毛の身に在るさへ自ら妍媸よりて愛憎の想を起す。二物の愚なる。いかんぞ何や人すらも亦これなるを。何平叔魏の人名は晏性は自ら動静を喜び粉白手を去らざるして行歩影を顧る。是山雞の羽毛を愛するに同じ。夏侯元讓名は惇魏の人は己の偏盲なる

明治十二年購求

悪み鏡に對する毎に（恚怒して）地に撲つ。是犀牛の影を悪むにおなじきなり。

无啓の民は死して心の臓朽ぬ。細民国の民は肝の臓朽ぬ。所謂朽ざるものは総て幻形にのこるなり。比干の心弘演の肝を以て史傳に載る。千歳の美譚なり。是を是真に朽ざるとなす。（発民按ずるに左傳国語に見えたり。叔孫豹のいわる先大夫死して言後世に傳るとは真に死して朽ざるなり。）

舟を馳る馬と名づけし。孫權の時にあり。言は馬の陸を走るが如きを取る。馬を驚帆と名づけし。魏の曹真字は子丹なり。言は風の帆を馳るが如し。いま人真の景を見るは畫の如きと言へり。畫の景を見るは真の如しと言ふ。又夢事を譚して（醒時の如しと言ひ醒時の事を論ずるは夢に似るなりと言へり。然るに則天下に定る名なし。公孫龍の白馬を非ずと言へり。味のあることなり。（発民按ずるに公孫龍子は偽作なり。白馬指物の言は莊子荀子に見えたり。白きは色なり馬は非ずといへり大意なり。）

梅は望めば津を生じ。苦を食へば涙つぐむ。五液の外なるに至るものあり。墓に涎を垂れて汗を發し是を五液の内なるに至る者あり。此を総ぶ

性情の鍾るとき後、形體ときに隨ふ。孟子ふ所謂志一至
きば氣これに次とつゝと。一徵の論ふのゝごとし。
氷を剖く双鯉の躍り出るを王祥あり。氷を叩く一
魚踊り出るゝ王延あり。氷ふ臥く童子の鯉を送
るものは。楚僚あて。泣く河神を禱く氷り開て尺
許の鱖を得るゝ査道あり。又焦華を寒中ゝ瓜を
得るゝ父の病を愈ゝ王薦を雪中ふ瓜を得く母ふ
渴を止む。孝思の感ずる處。動植の類をふ及ぼ時ゝ非
ずゝて是ふ感ず。彼の季夏ゝ凍魚膾を思ひ。仲冬
ふ生地黃を思ひ。南面の尊を以く有司を功責ゝ。燕
恭客大辭を加るふ至ゝ得ることゝ。きば至
誠の神を感動ゝ非時の異物を得るを只孝の一事
のみあて。
松を五大夫五大夫七大夫五大夫中の小封ゝ始皇あり。柏を
五品大夫ふ封ゝ武后あり。石を盤固侯ふ封ゝ
宣和宋の欽宗五年ふ時あて。鶴を軒く乘ゝむるを衛の
懿公あり。左傳ふ出ず蝦蟇の廩を得るを晉の惠帝ふ
時あり。雞鶩の縣幹ふ食ゝ犬馬ふ赤彪儀同或ハ逍遥

郡君或ハ凌霄郡君等の封號ありて北齊の幼主れ時なり。夫木石鳥獸みな爵祿を得ざり然ばなるまち爵祿ハ何ぞ以て士人を榮とするに足らんや。

泰山の五大夫の松といふ本五大夫といふ。秦の官あり。又獨異志を閲ちれば然らず。始皇二十八年始皇泰山に登り半に至つて忽ち大風雨雷電して路の傍に五松樹あり。數畝を蔭翳せ。ずるまち封じて五樹大夫とあるを。ここを五大夫の松由て名づくる所なり。人ありて松の秦の封を受るを以て大に松乃汚辱とせ。（當時松樹の上に人在りて

言ふ。道德仁義ありて天下を得。みざりに命を受て天帝何ぞ以て。ここを封ざるや。と言へり。然るに則五の松ハ実にいまだ嘗て秦の封を受ざるあり。後世強て五大夫を以て松に命ずるいそれを是をいのんちんや。

（竟民按ずるに秦の始皇泰山を下る。時風雨暴に至る。樹下に休に因て其樹を封じ五大夫とあり。何の樹ありしを。後漢の時に憲邵漢の官儀を作る始て松樹とせ。莘一松柏多く泰山の中天門に憲邵の時に至つて猶在り。故にその松ありしを知るあり。五大夫ハ蓋一秦爵の第九級あり。曹參如き爵七大夫を賜ふ。選て五大夫とある是あり。後人此に倣ふ。遂に松を大夫に封ずること五とふ。故に唐人の松の詩に不羨五株封の句あり。皆ちれ循韓ちれ不攻んぐざるの過あり。又五雜組に秦の朝にて松を大夫に封じ陳の朝に石を三品に封じ云々。李誠の松を詠じ云半依巖岫倚雲端獨立亭亭耐歲寒。事頗爲清節累。秦時曾作大夫官。刺公三品の石を詠じ言草沒昔侵棄道周誠恩三品竟何酬。国亡今日頑無耻。似爲當年不與謀。それ松と石とハ無知の物なるに一に二朝の名寵ありて故に松の黥刑とせ。猶万世の包彈を免るべ刺や士大夫その進退辭受の際に

おのそ荀子をまん
くんせを云り。
晉の文公の必ず天下を霸くるを知るとその從者三士ありて
以くあり。狐偃趙衰賈佗宋の壽王真宗の必ず帝たるを知る事其左右
二人ありを以てあり。張晏風雲龍虎ありて偶然ありて
揚崇勳
ず。亮民接ぐるお国君無道あり良臣二三の輩ありて国を〻〻ありよ至らず論
語ょ孔子の衛の靈公の無道を論ずるを見て知るべし。
漢の大官園に冬生ずる葱韮菜茄の類を種覆ありて屋廡を
御用の菜蔬ところ所　むろの類
以て〻〻晝夜塩火を〻〻温氣を以て生ず其種る
所の冬生ずる物を進御ょ供ずあり。寧只菜茄の類の
みあらず非ず。名花異卉凝冱の辰ふ列らず晩今
ねぎ　ねぎの類

人工の巧み天工を奪ふに至る奇あるうふ。昔〻邵信臣前漢の人
不時の物を見て供養ょ奉ずるるべと言り。深く聖人の
不時を食ずる旨ょかのふ。又桃李冬華さ實る霜草をあら
ずるる。春秋ょるる〻〻書〻以て災異とふを彼の春華ょ
〻〻。冬生ずる物又何ぞ以て非時ょ進御ょ供ずるふ
乾鵲を来を知る猩々ハ徃を知る巣居ずる鳥を大風を知る。
獺ハ穴棲ずる。獺を洪水ありを知る。運日鳩鳥の雄ふり雨を知る燕を戊己の方を知る避く鵲ハ大歳の方
を知るるるるる。内典ょ言ふ蠢動の含靈ありを皆佛

性ゆうと正しく覺る処ゆゑ是を見るべし

と言へり。淮南子に乾鵲を来を知り往を知らざるゆゑ

を来を知るも年風多くは巣を下の枝に作るは智なるも

似たり。去ども童子の其卵を探る事は察せず。

是その愚なる所なりといへり。

晏子は狐裘を着る事三十年。礼記張儉が敝袍をすること三十年

を經て用ひ。遼史に張儉は寒中に便殿に事を奏せ時に聖宗張儉の衣袍敝悪なるを見て其衣袍を易ぜ帝その故を問給ふ時張儉對て白臣この袍を服せる事已に三十年當時上下共に奢靡なる故微諫せんとて以て諷諫せり。下彬が著る所の冠十二年にして改易せ。南齊書に下彬は帛冠十二年改ざりし。

虞玩之は躐所の屐二十年にして辨易せざ。南齊書に大祖鎮たる時に朝野の人々皆敬をいたせる。其頃虞玩之は屐を踐く席を造りて大祖屐を取りて視るに斜鏡にあり美をきりて芒を以てつゆぎり大祖問て言卿がこの屐は幾載にあるか。玩之對て征北の行佐に拜せし時此を買ひ著る事已に二十年。貧士竟に辨易せざと答へり大祖はその儉朴なるをうんぜり。長孫道生は一つの熊の皮の障泥を数十年にして易ざ。北史に魏の司空長孫道生は廉約にして身三公たり。衣は華飾もなく食は味を兼ぜ。一の熊の皮の障泥を十年にして易ざとなり。この人々は儉徳を世間の靡風を挽回せるなり。

延陵の季子劒を掛る所は生州一種なり。能心疾を療せ。信心の感ずる所なり。子陵の釣臺は畫く白茅を生ず貞心の感ずる所なり。長禾が鍾室は草丹と血を漬が如し。怨心の感

さる所あり。

鍾山の玉を爐炭を以て炊く。炊く事七日七夜みな色澤変ぜず。摩尼の寶珠を泥潦の中に置く百千歳を經て潦汚せず。本體みづから堅琤あるを以て也。（堯民按ずるに君子德を玉に比ぶ）

磷せず涅まず又如此くあり。錢いまだ磨して孔子自ら磨して緇ずとのたまふ。

孔愉を龜を放て候はあり印を鑄るとき龜顧るの祥なり。晉書に見る其卒に及んで龜木を啣み孔愉の墓に来る。この木後世に至て龜啣樹と號す。溪を龜溪と名づけ橋を龜田橋と名づけ生るを放つの報一に此に至る亀を四霊の一と称す。禮記に固より諸の虫魚とは異なり。

田猟をこのむものは獸を得ざるの前には其創の小なるを恐る。是を創まれば獸屈して逸し難きなり。故に已に是を得るときは肉を傷るの多きを恐るること人情なり。君子曰凡得失に関るこの類おのおの。又美人彼の所に居るとき我に許事を欲いま我妾とまれば人に許ることを欲ず。戰国策に是人情なり。君子いまく凡彼と我に渉るこの類志うる。

晉の靈公臺の上より人を彈じ其丸を避るを觀て樂とす。左傳○終に趙穿に弑せらる　巢王元吉は唐の太宗の弟後に誅せらる　衢に當て矢を

發し。人のこゝを避るを見て樂む。齊の後主は蟻を浴斛の拌あり置て人を裸にして きの内にいれ呼號して宛轉するを見て喜ぶ。又齊の文宣も道を行毎に死囚（死罪人）を載せ從ひ他の怒ることなれば召出して是を殺す。人是を供御因と呼ぶ。人命を芥の如く視て喜怒を供するいとゆる惻隱の心なきは人にはあらざるなり。

寒山拾得は豐干を以て饒舌とす。（神僧傳に豐干を拾得寒山子と相友として歡事甚し。一日豐干呂丘胤の風疾を療して因て大に敬せらる。其時豐干に問て云く寒山拾得賢達なりと。豐干對て云く寒山を文殊拾得を普賢なり。因て呂丘胤寺に入て二人を見て拜をなす。二人起走て云く豐干は饒舌多言なり。弥陀を識らずして我を拜して。何とかなさんといへり。）

大虛眞人いへる惡人の賢人を害するを天は仰いで唾を吐るが如く還て己の形を涕を風に逆て塵を揚るが如く。塵彼を涕さずして還て其身にそゝぐと。是を經中の語あり。經にいへる惡人の賢者を害するを天は仰いで唾するが如し。唾天に至らずして還て己の身に隨ふ。逆風に向て惡塵を颺げば上なる人を汚す。故に賢者は毀るべからず。禍必ず降て身を凶す。太虛眞人はいへる凡人百人は飯をあたへるは善人一人に飯をあたへるは善人千人は飯を

はゝ〻る人一人の學道者これを聖人の道は非ざる黄老の道をきゝてこれに飯をはゝ〻るかたゝどゝ是も又經語あり。四十二章經にいはく悪人百人は飯をはゝ〻るよりも一善人は飯をはゝ〻るまさるなり。善人千人は飯をあゝ〻るよりも五戒を持ち者一人は飯をはゝ〻るまさるなりと有て。道書多くは釈典に依附せれ又一證なり。

春秋に雨降て木に冰る事を木冰とはゝり。一に樹介と名づく。其介冒は象るをいふなり。唐の宣王憲太廚の官に見〻嘆じていはく是を俗は樹稼と名つくる者なり。諺曰樹稼は達官に宰相を必ず大臣にまさに當る者はらんと。其後たゝ〻宣王憲これに應せり。この木冰の事宅山氏考はり頗る詳なり

王求礼は春の雪を祥とふさん。旧唐書に三月雪ふる時は陰にまさる。蘇味道等吉瑞なりと表を草して賀せん事を求む。その時王求礼是を止て曰宰相は陰陽を調燮とゝのへまつる職なり。然るに暮春に雪降るは災なりいかんぞ瑞たる事を得んや。三月の雪を瑞雪とあらば十二月の雷と亦瑞雷なるべしと。朝に舉て嗤笑して口實とせり。杜景儉は秋花を以て瑞とあるべし。則天常に季秋のうち梨花一枝を出して宰臣に示して陛下德草木に及び。故によりて秋木再び花さく。周の文王の德と雖ども是に過ぎず。杜景儉のいはく謹んで洪範五行の傳を按ずるに陰陽倫を奪ひ是を瀆すときは災とあるに今已に秋にして草木黄落の時なり。然るに此花を生ずるは陰陽を瀆せり。臣慮るに陛下教を布き礼を施せ皆

礼典を斷る事なり。又臣等〻〻宰相とありて天理を助け陰陽の和
をぶるは臣の罪なり再拜して罪を謝す則天いよ〻〻卿を真の宰相なり。

君子いよ〻〻能く時を知るなり。

姜維の膽大さ斗の如し。蜀の忠臣張世傑の膽も亦大さ斗の如
し。宋の亡る時の忠臣なり。山房隨筆張世傑の膽大さ斗の如し。李膽の膽大さ斗の如
し。屍を焚て〻〻紀膽の大さ斗の如し。南史膽兵を起し三国志趙雲と一身都くるを膽王雅い身を
く候景を執る。子龍

舉〻〻娶〻是膽。北史

曹不興の屏を画ぐ時誤まりて筆を落さるを因てその墨を
そのまゝ蠅を畫く。吳録曹不興画をよくさを孫權屏ぶを畫ぐ
ありとして手を以て拂ふ。王獻子を扇を書る時誤まり〻〻筆を落
む誤て筆を落さを云孫權これを見て生蠅

さを因てその墨を就て特牛をあるとみな誤を因て奇を見し
るるあり。晉書桓温王獻子をめして扇を書せしむ
筆を誤て落さを因て烏駮ぶち特牛を畫く

越絶書いよ〻〻慧の種を聖を生ざ癡の種い狂を生ざ桂の
實を桂を生ざ桐の實い桐を生ざ此論い恒の理のみ必ざ
しも然らず。凡梨を種る一梨十子〻〻三子梨を生ざ
餘を皆杜林檎の類を生ざ。齊民要術鶻三子を生む一を鳩となる。
鶻鵲の類三子を生む一を鶴となる。夏雀い鶉を生み楚鳩い鷃を
生み。泊宅論鱷を百數生み鱷となる者才を十二餘或い龜と
なり鼈となる。瀧水燕談此則氣の襍を得るものあり。又蛇

化して龜とあり。雉化して蜃とある。雀化して蛤(蛤蜊)とあるは此等は忽曲屈を忘れ蹣跚を得。彼等は條然飛鳴を失(鳥のよう)く介甲を得るあり。鷹の鳩とあるは変じて仁と之あり。鼠の化して鴽とあるも変じて善と之あり。老楓化して羽人とあり。朽麥化して蝴蝶とあり。亡情より有情と之あり。賢女化して貞石とあり。山蚯化して百合とあり。亡情と之あり。帝辛の時雀烏を生み。宋康の時雀鸇を生み魏の黄初中

小鷙鷹を生み周の幽王の牛化して虎とあり。羊化して狼とある。此みな蟄るの氣を得るものあり。是より甚しきは馬の人を生む秦の孝公二十一年狼の男を生み阿史那子狼了人或は交て十男を生む虎と化す淮南子嫗或は龜了化す後漢書此皆氣の異るを得るものあり此よりを以往幾千万知るべし。

魯の昭公の八年に石晉の魏榆と言ふ。左傳晉の愍公の五年石平陽と言ふ又載記に石陝と言ふ。左傳晉侯師曠了問ふ石何ぞ言ふ師曠對て曰く石を言事なるべし或ものあらん。然らざるは民の

聽濫るあり。柳作事時あるざるに怨讟民を動く時を言いるざる物なし。言ふ事なり昔より災異の譚ハ如くの如く確あるはあり。又晉の惠帝大安中小張騁が乘る所の牛言ふ事ハ天下乱る。我ハ乘ゝ何くか之張騁も懼ゝ途中よりゝ。其時犬まゝ言ふゝ曰帰る何ぞ蚤まゝ張騁まゝ大ハ懼る唐の左軍容使の嚴遵美ハ一旦狂を發ゝ。手足舞蹈まゝ家人皆訝る時ハ猫犬ハ謂くいゝく。軍容常を改む。いま主翁の顛發まゝるハ非常の乱なる

ゝゝと犬いゝく彼を管まゝる事あゝ。ゝれがまゝにあまを尽ゝ。後ち遵美ハ異ハ因ゝ難を免ゝる路岡相乘ざる所の馬ゝ。ゝゝ人言を作ゝていふ。蘆萩花ゝの花開くの後ハ路ハ家あゝ。路ハ姓なり昨ち京房が易数ハ曰牛よゝく言ふ其言ハよりゝく吉凶を占ふと有て。又易の萌氣樞緯書いゝく。人君士を好まざ走馬文繡を被る犬狼人の食をゝゝゝ六畜譚言ゝる事ハ多しといふ。總ゝ師曠ゝ数語の正確なるハ如ゝとあを。堯民按ずるハ此類の災異漢唐以下の史五行志ハ長侯瑾ハ鳥の語を解ゝ。陽翁仲李南ハ馬の語を解ゝ。唐の僧隆多羅猶殿ゝ攻の葛慮ゝ牛の語を解ゝ。公冶白亀年ゝ鳥獣の語ハ通ず。成子揚宣ハ雀の語を解ゝ。夫鳥獣の音ハ身

を終るまで一律あるべし。左氏の誣る野史の説を論ずべし。公冶長ハ聖門の高足なり。此詭怪の名を受る。宋之問の詩ニ至ル不如黄雀語触免冶長災と詠じたるハ真ニ以て実事とあるを似るべし。世人ハ傳ふ雀公冶長の舎を繞つて呼て曰公冶長南山の虎羊汝その肉を得よ。我もその腸を食ん。雀いまだ晴々嘖々白蓮水の邊車ゆつて粟を覆ふ。車の脚泥ニ淪て犢牛ハ角を折る。是を收どり尽さず相呼て共ニ啄まんそれ雀の人言を作ス固より怪むべし。春秋の時の雀沉約の韻を用ゆることを知る。又怪むべし。まして太原の王氏厠の神を祭るニ因て蟻の言ニ事を聞ずと。

奇譚ありと五雑俎ニ見ゆ。

道家ニ人身の中ニ三尸蟲ありとて人の過失を記す。

庚申の日ニ至て人の睡るニ乗じて是を上帝ニ譖ず。

道を学ぶ者遂ニ庚申を守るの説ありと。庚申ニ至る毎ニ睡らず唐の道士程紫霄一詩ありて深くその妄を辨ず程の詩ハ

て不守庚申亦不疑此心常與道相依。（王皇已自知行止天皇の事）

任甬三彭説是非。こゝを千古の惑を破るニ似たり。それ上帝汝ニ臨て幽隠あらじ。照ス一念善あらば何ぞ三尸の譖を畏ん。一念不善あれば何ぞ三尸の譖を解さん。然ればこゝを以て庚申を守るハ己身を守るにしかず。

尭民按ずるニ程紫霄終南の大極觀ニ會して朝の士に為ニ言ひて曰く吾師是ニ託して悪を為す者を懼らしめ示したる事明人の随筆ニ見ゆ。いまその書を考ずるニ詩を作て衆人ニ如ず。

魚の木ニ緣るの峽中ニ鯢あり。鮎ニ似て四足あり長き尾あり。雅州ニ鮒あり。鯢ニ似て足あり声ハ兒の啼ニ如ず。樹ニ上り声小兒の如し。南方石班魚

溪澗の中小あり　小石の上に生ず。鮓よ多くして甚美なり。豈木石に縁て皆以て魚を得ざるさまなり。

春夏は早起鷄鳴の時を取る。秋冬は晏起（日出の時を取る。蓋陽に在ればなり）

さて陰涼に及ぶん事を欲し、陰はいのちび則温暖に及ぶん事を欲さとて。ことを脩養の道あり道書に見へたり。

老泉を老蘇（名は洵字は明允）の號とす。東坡を長蘇（軾子瞻）の號とす。

天下是を傳ること久し。葉少蘊が燕語に曰く、

子瞻黄州に謫せらるゝ。東坡居士と號す。晩年に及ぶまで老泉山人と號す。是は眉山の先塋に老翁泉なるを以てなり。

長公の印章に亦東坡居士老泉山人なるべし列せるものあり。これに拠る。豈蘇家父子に別て別號を同ふせんや。古人の重ずる所は字なり。別號の起るは古にあらず。原より重輕をおもはるべし。則蘇家父子にあらず。奚ぞ是を疑んや。明の文徵明の父温林原に守として衡山に籍を其所の名籍に合し故に父子ともに衡山人と書す。

韋仲將は書成て髮白し。魏の時凌雲閣成る榜題せらるる事を忘る。乃ち仲將を召て櫨を懸のごとくして是を書せしむ。仲將は汗を流して氣息を除く。周興嗣は韻成て髮白し。選て子弟に語て云く。宜く楷書の法を絶すべし。武帝鍾王の真迹を取て。周興嗣に御覽梁書を引て云く。武帝鍾王の真迹を取て。周興嗣に授け重撰せしむ者千字を選ばしむ。韻

今傳る千字文

〻是を文ふさ周興嗣一宿ふして。李日知母の病〻。侍さる事
〻てまろる鬚髪こそ爲ふ皆白〻。旧唐書ふ張景憲の母卒〻一夕ふ〻
数日ふ〻て髪白〻。見へ〻り宋史ふ出憂慮の心を損さる徴のみ。
〻鬚髪尽〻〻白〻

王義之天性鵞を好む。會稽ふ孤居の姥あり。一鵝の善く鳴て養
ふ。王義之賀を命じて就て見る。姥と王義之の至らんとを
るを聞て烹て。是を待つ義之嘆息さる事数日。又山陰の一
道士好き鵞を養ふ。是をかうんと求む。道士いふまゞ為
て。道徳經を寫〻。給らん。群鵞を贈らんと。義之欣然彼の
宅ふ就て寫〻おさり。鵞を籠ふて帰さり。唐の李羣玉の

好〻笙を吹。急就章史游の作る処を善さ鵞を食ふ事を喜ひ校書郎
を授て東帰さる時盧肇詩を送て云。妙吹應諧鳳工書定得
鵞全唐詩語。二子書ふ工ある同じ。鵞を好ものと同じ。但義之い
孤姥の烹を嘆息〻。羣玉ら偏ふ鵞の肉を嗜のみ其口腹
の〻めふさるハ義之ふ比さるふ甚劣を覺ゆ。

疾膏肓ふ在る治さるゝを秦の醫緩是を知る。左傳疾さでに
心ふ入る救るこのゝを隋の醫許智藏是を知る。隋の文帝の子秦の孝王俊疾ひて名醫
許智藏を召て孝王俊の夢ふ亡妃崔氏泣〻いわ〻智藏至らんとを必を。苦
〻むる〻〻霊府の中ふ入る是を避ん智藏孝王俊の脉を診〻てその事を三
良醫よく疾を療さるも心疾を療さる事ハなきを。心よ

く慎めば疾を嬰る事もなく有り。

李行簡が父癰を病む楚甚し。行簡ためにその膿を吮ひて。

もを地に哇きいぐるを。父霍然として病ひ愈ゆ。癰

を吮は一有り。行簡の若き至性に出づるあるを。然らば

漢の世孝を以て天下をおさむると稱せらるるも猶難し

とも。景帝太子たる時文帝の為に癰を齧て色をうご

る是を難る又寵を加へんとて吮ふべく厭ふ

心あるべき鄧通佞倖傳が文帝の為にせるなり。衆の心を結

んとて是を吮ふ事を恥ざるは昊起が卒の為に

せるなり。韓非史記佞倖ならんと吳起を又取

る事有り。何とあらばば吾がその妻に薄。宋の將たる時

妻をそれ士を愛せる眞に非を知るべし。

孔子の木履を蔡の客舍に盜まる。論語隱義に孔子蔡に至て客

舍に宿せし夜孔子れ一

隻の履を盜む別に盜に遣ひ家にあり孔子の履長一尺四寸。孔子の履に

凡人の履と異る故に孔子を盜ありと誣んとの奏計なり。

晉の武庫に燬る。事は晉書の張華の傳に書を武庫の灰に

累代の寶文を燒亡せる孔子の履と漢れ

高祖蚩尤を斬り劍王

幣の頭共に焚失せ。

董仲舒いはく仁をもて人を治め。義をもて我を治む。厚甫が

曰仁の字人に從ひ義を我に從ふを文字を造るの意か

らん。

秦苻堅僭号の師鶴の唳を聞く晋謝玄等大將なり兵をひきひ書晋元

琰々鶴の唳を聞く是を叫の聲ありと疑ふ。南齊書に云元琰江陵を守る張敬兒の軍白水に至る元琰城外の鶴の唳を聞く是を叫の声と思ひ懼て走らんとす。敗軍の氣を復振ふ

さて其魂是を禍とするのみ

元琰に至つて性懦にして論なしとす

天の魂を奪とゞめ

博士の驢を買て券を書さす三枚の紙いまだ驢の字なくして顔氏家訓○こゝに書生の迂濶なるを笑ふ工箭手官弓矢を授けらるゝ力を無用の文言多きをいふ。宋史に余延業なる者ありて太祖とゝかして曰南嶺南の刘氏に在る時何の官を為を對ていはく極て強を控ゞ開すゞ

弓箭手官なり因て命じて是に弓矢を授ける。延業力を極めて強を控ゞ開すゞ

蒲元は性奇思多し孔明のために刀三千口を鑄て當世に稱絶せらる因て神刀と名づけ孔明の為に一脚牛を造て糧を運べしむ然るに木牛流馬の制に豈蒲元に肋るところのものあらんや

蒲元が別傳に蒲元は孔明の西曹掾となる北の方魏を伐て粮運つゞかざる事詳なり。されども暑さを憂ふ木を以て一脚牛を作て

宋南宋刘代の御伏に孔明筒袖の鎧帽（ぶとびりの帽子）に二十五石の弩にて射どをいる支ばかりまで武崗に渠を鑿て孔明の鷄鳴枕を得たり中に機局を設け以て夜氣に應ぜ特に巧絶

とも是も蒲元の輩製をる者、孔明軍務に心を勞し恐らくは璅々たる物に及に暇なくして又武備に諸葛の銅鼓を得るその所を是を擊べ響き山谷を震ふ嶺を隔て猶きこゆといふ。竟民按ずるに孔明いまだ廬を出ざる時婦翁の黄氏に問きゝられば木偶ぢんの斷のるいとうちたるを見て感ぜし事なり。木牛流馬その遺制なりんとふ說なり蒲元蜀江の水を取らしめ刀を淬せしと世說に見へたり。

顔子は十八にして天下仁に帰せ東漢書曾子七十にして孝名天下に聞ゆ。顔氏家訓

夙慧晚達功を成せば則一なり。竟民按ずるに顔子の如きも論あるべし事の按そくあるべし其他は老子の大器晚成の語極て味ひあり。

模木周公の冢上に生ず。その葉春は青く夏は緑秋は白く冬は黯色その正を得るなり。

楷木孔子の冢上に生ず。その幹枝まがりて屈せず。質その正を得らるゝ。

周孔を後世の模楷と為す。家木その霸に效ふ。義伏羲文王墓

上にあるびに著艸を生ず義文後世のために易を作る。

墓艸其異なるを著す。

大別山の陽興國寺の前に古柏あり。相傳ふ大禹手づから植る者なり。山川紀異に柏の根盤曲めぐらす漢陽縣の西柏泉寺の井底にいたるとつゝ曲阜縣文宣廟前にあるびに殿の西南柏の葉松の身の樹なり高さ五六丈相つとふ夫子の植る所封氏聞記見

顔回の墓なり。墓の上に楠樹二株あり三四十圍なり。土

人いよ顔子手づゝ植る。述異記 いま孔林の中に、夫子子貢の植る所のその猶存せ、獨て禹の植る柏のみに非ず顔の楠あるを知るも否也傳よいまゝ、その人を思へん猶その樹を愛せ古を弔ふもの好んぐ是を護持せ。

仲尼の弟子七十二人のち刘向列仙を傳へ皇甫士安が高士を撰らむ。陳長文の耆旧を撰ぶ並に七十二人なり。豈仲尼の弟子に彷彿るを欲せるその人を得ざるして偷まとりて数に充とせ、實の声に非ざるものなん。

黄石公なるものと所の素書なりく亦丹書なる葛仙公いまく素書とせ書とせふるもの。河上公以て漢の文帝に授るものあり。或きとゝ如此あるべ子房墓中に是を得るに應ぜざるい

ま傳る所の素書。その（贋本）る事疑あり。豈さふ

張商英の筆なるんも丹書に言ふ所の身の八殺（貪殘淫佞酷狡侈）

訐命の四業（背惠恃己狎侮）不肖（妬賢疑眞）に格論あり惜すまとく傳ハ

らん。（尭民按ずるに丹書を大公の武王に傳へ事大戴記に見ゆ。）

常惠ろつゝ蘇武と共に匈奴に使せ武を節を持て漢に還るさゝどる位典屬國に過ぎ。惠の節を烏孫の為に盗まる。自ら抑へ誅せるぐゝと然るに卒に長羅

疾あるを失いざ漢の功を録さるい恵よ厚くして。子卿（蘇武の字）
薄ないつよ我も。
世れ高疾さべく曉るべのらざる者い身漸く縮小して。
卒よ小兒の如くある有て。宋の呂（縉叔）忽ち字を識ず数載ゆ
てはゝめよ復る者ありて。姜（愚）直物を見くみゆ曲て弓
弦（界尺の類尽く）鉤の如きもの有宋の時の女子盧扁よ逢とも何を
以く是を療さる事を知らず。
丁公藤風を療さるよ最験ありて。宋の鮮叔謙の母風疾を患
（木の名）
叔謙昕夕懇よ禱る忽ち空中よ語ありていく此疾を丁

公藤を得く酒とあさはさるいち瘥ん因く遍く是を訪
くもく山中一老翁の木を伐よ遇ふをもちこの木丁公
藤あり。叔謙つぶさに来意を述ぶ。老翁愴然として是
よ與へ并よ漬酒の法を示す。顧視さるきい在る所を失ふ。又
蕭叡明の母も風を病ぐ沉卧す。叡明禱祈して輟さ。寒
氣の節あるべば叡明の涙みゆ氷とある。忽ち人ありて小
石函を以く是よ授くいるく。こゝき風病を療さ忽ち見へざ。
函の中惟寸絹の丹書日月の字を為さのみ。昔ゝ顔舍蛇
膽を童子よ得くり。晉書よ顔舍嫂の病よ因く蝴蛇膽を求むる陸
く晝坐さ忽ち青衣の童子来くく是を授く。

襄粟漿を老人より得たり。南史に襄の母むかしむ三升の粟漿を求む時寒くして暮に迫る忽ち老人門に請て漿をのくる尋て其人刘霧哲と奇藥を枕邊に得る。南史に霧哲の母病み夢て黄衣の老公藥を與へくいて此をとりて食ふべし夢さめて藥を枕邊に得る母の疾ひついて愈る。梁彦光と紫石英を園所に得る。北史に彦光の父疾医のいはく五石いまだ得ず前の二事とまさに同じ。時に紫石英を求むるに得ざる忽ち園中にて是を得る

孝友の至性と神明に通ずるに足る又あんぞ感格のことあるを疑はんや。

衛玠豫章より下都に至る觀る者堵の如し玠の體勞に堪ず遂に病死す人ことを衛玠を看殺するといふ。蘇子瞻海外より昆陵に帰るに伏暑を病む小冠を著け半臂を着て船の上に坐す。岸の左右千萬人ことに出て觀る。子瞻坐客を觀て（胴着の如きもの）いはく我を省殺事あるをいはんやなくまた竟に荊溪に卒す。

昔し古強ある者はあり。敢て虚言をなすことなし。已に四千歳曾て堯舜禹湯に見えて是を説こと万々實の如し。又いふ孔子嘗て我に勸て易をよましむ。曰ことに良書なり。西の狩に麟を獲たり。孔子に語ていはく吉祥に善祥に何ぞ。蔡誕曰老君の為に数頭の龍を牧す。項曼都いはく龍に乘て天に上る紫府を過ぎて金床玉几晃

々あ〜び抱朴子に見也宋の張懐素。道術神に通じ飛奮走獸に呼て是を遣ふ。みつ〜いに孔子を少正卯を誅し。ろをうて諫て以て亡ぶ。亡ぶ命。漢楚成皋小相待を。ろを高に登て戰を觀る虞仙姑婦人年八十にして少女の蔡京に詣て一の犬猫を見て。その背を拊て。いまく此章惇なり。古より方士者流抑ゐむ。ゐ奪誕多し。かくの如くあ〜ざむけば。世を欺き俗を駭さよ足らぬと拙り。世俗まと因て是を尊信を。聲を聽響に集て雲の如く萃り霧の如く合を。文成五利漢の武帝の時の徒て術よく人生を動さに至る。谷永抑りひら〜風を捕へ影を繫く。抱朴に法惑の論あり。

李景遜の母唐の淵西觀察使鄭因その牆壞て錢を得る事盈に至る。鄭香を炷て天を祝していまく願くは諸孤の孝問成ることらば。此を敢て取らを命じ。掩て是を築て蘇子瞻宅を眉に儆を。二婢足忽ち地に陷るを見て板の大甕覆て人に下に宿藏の物あり。子瞻の母命じて亟て土を以て是を塞ぐ。二母の智識賢明豈〜ぐ笄幃の俊のみなら〜ん。男子とくらべ及ばざるの遠し。

胡景畧一怒てみづから其齒をとみ齒みふ血を流を。南史

張睢陽神氣慷慨みして賊と戰ふ毎に大に呼て師と誓ひ眥裂て血を流す齒牙みな碎て又唐の高祖すつて侍臣にいふて云吾をして蘭相如の秦皇を叱せ眥さけて血を出す王君廓往て竇建德を擊つ出て戰ふとき李靖是を遏む君廓發憤して大に呼ふる目抉び鼻耳一時に流血せそき戰ふ勇氣あり睢陽氣賊を滅せんと欲して相如氣秦に抗せんと欲して彼をその血目眥に溢る忠義の氣激するより流る景畧君廓一時の怒氣憤盈てぶ〳〵て血是に從ふその血氣の勇ある〻

盧綸沛公と同里呉質曹丕と席を接て許紹ち唐高と共に李び其後て〳〵おのゝ〳〵並に里閭の曩好を存して硯席に旧歡を追ふて〳〵寵遇加ることなし〳〵そき貴て人主と為て〳〵猶故交を遺さざるて則ち彼を身樞要と都問布衣に抑よせざる者ハ何の心を知らん〳〵

狄梁公仁傑性医藥に明あり尤も針術に妙あり制に應て〳〵関に入て〳〵一時華州に富室の兒あり鼻端に贅を生て大さ拳石の如し根蔕鼻に綴て絶て食筯の如く是に觸さば酸痛骨を刻両眼贅の為に垂さて目睛白

小翻を楚甚〻〻絶ちんとそ。その家巨牌を揭げ。此を療さを
る者を求む。鼎ょ絹千疋を許さ。公一見〻て惻然と〻〻て い
く吾よ〻〻為さをそ。脳後の下ゝて針さること寸許仍て
病者ょ針氣の病ょ逢さそのと問ひ遽ょ針を抦〻〻贄手ょ應
〻〻落る目瞪礼の如〻その家且〻と泣き且ハ拜さを鼎所
の縑をいさを。公ゝ〻〻〻曰吾急病ょ急ょ〻て志をお
このゝのみ。左傳ょ顧ざ〻て去る昔人〻〻〻云。良相た
らざるを則良医と為を。蓋濟世の術鈞ゝきばあり。梁
公の如きの良相良医兼長〻て並よその效を收るとのゝ。

續博物志よいゝく。荒い獬豸の皮と緝〻以〻帝帳とあを。
そゝき後世恭儉の至ゝ代上書の囊を集〻〻殿帷とを。漢礼
文帝彼の第茨土階の世いゝんぞ供帳の侈をあ〻て一ゝ此
ょ至ゝんたゝ〻當時獬豸以〻重とすさば皋陶さきを
用ひ〻有罪ょ〻〻〻めん然るょ尭ゝ〻〻其皮を寢處
とせんや。其肉と食〻其皮と寢所とせんとき左傳ょ出つ管子おいゝく武王侈靡とあ〻
今〻ていく豹擔豹裘〻て廟ょ入ることを得ざ〻〻故ょ
豹皮百金功臣の家裘千種ゝて一豹皮を得さを聖王ゝ〻
一物と珍ゝ〻て臣下の累を貽んや。尤も荒唐ょ属を。

南越を孔雀を以て門戸とせり。崑山を璞玉を以て鳥鵲
を抵つ。有餘を忽あて山を居け魚鼈を以て禮をなす。沢
を抑さげて鹿豕を以て礼をなす。（礼記）足らざる所を珍とせ
ざるなし。

王莽の時南陽の市中に一肉塊を生ず。斫れども刺れども入らず。
以て費長道（後漢の費長房と別あり）に問ふ。長道いはく此ものの一名肅と
名づけ二に仗と名づけ中に鐵券なり。長事三尺六寸。つぶ
王家衰へ刘家まさに興らんとす。七歳の女子をして
尿せしめば開ぐべし。莽是を試むるに果して然り。（搜神記）

魏志に公孫淵の時襄平の北市に肉生ず。長圍あまねく数尺頭
目口喙あり。手足あり。動揺を占ふに形なり
て成らざる體あり。聲あり。其國滅ぶ。載記刘聰の時
流星平陽の北十里に落つ。是を視るに肉なり。長さ三十歩廣
さ二十七歩。臭ること平陽に聞ふ。肉の旁常に哭声なり。生肉乃
異なる大都凶國の徵なり。

毛寶の軍人亀を江中に放つ。軍人の江に投ずるに及んで石上に
抑へるが如きを覺へ竟に岸に登ることを得ざるに。即ち放ところの白
亀浮んで是を送る。
彭彖蟲の李進勍魚を江中に放つ。進勍魚を殺して金陵に至る船の内
千万人誦經の声なりしを察

ちゝきは即ち舟中の魚ちゝきを
ほどこす因くこれを放つ。進勧の江に墮るに及んで足下履ところ
有るが如し。竟に以て濟ることを得る。進勧業を改めて薪を販ぶ風
下に見る是に乗じて遂に舉に登ることを得る。一念生を好めば感鱗介におよぶ人事何
ぞ苦んで必ず殺を好まん。

齊の師敗れて帰る。習の為に辟司徒の妻に問いわく君免るゝ
や。鋭司徒免るゝ也。鋭司徒を鋭兵を主どる。いわく君と吾父と
免るゝ若何。言は餘人に亦いふ。君子いわく重んぜる所
を知る。成二年の左傳。君父と夫を重んじ為すべあり。齊王建使者を
して趙の威公に書を抑へしむ。いまだ發せざる威公使

者に問わしいわく歳に又恙あるか。君子曰重んぜる所を知る。戰国策

歳民君を重んじとされいあり。

唐仲俊は千字文を讀ませとなり。蓋心動けば神疲
るの四字あり。此を以て平生事に遇して心を動ずべ。
老に至つて衰ぜそれ千字文いたさる童子ゆえに此を
習はざるんば。仲俊竟に四字を以て力を得るさるもの知
る書を讀むの言下にくり見ることのべば則巻を
けば益なし。

王聖美孟子を讀むいわく頭より曉らさる。孟子諸侯に見へ

ぞ何に因て梁の恵王に見ゆ。聴その愕然として對なし。
そのとき孟子諸侯に見へざる信に。このときはすでにまたつくいたづらなり。
迫られ見ゆべし。當時恵王礼を卑し幣を厚し
以て賢者を招く。みづから垣を踰へ門を距の士にはあらざれば
まして何ぞ一に見ゆるを妨げんや。見ゆる枉て見ゆるに非ず。則
此を見へざるといふは又宜なり。
郭原平。范元琰（筍を盗む者のために橋を立て渡す。
竹を植る所に溝あるゆへ因てなり。並に南史に出づ。）
桑棗瓜を盗むものを見て輒に道を除
〇園中に棘ある木のあり。恐らくは盗を傷る事に因てなり。
て此を逼す。君子のいまくこのとき厚道なり

乃橋を立道を除く。たまたま過ることありしなり。昔人園蔬を
竊を見る者はあり。〇宋の羅可艸間に伏してこれを避く。以てそ
の去るを俟つ。只かくれ如くゆしてたるまで足をぞ。
左傳晋の子貢をして。鄭人にいましめて曰君楚の命
はりて亦一介の行李を使として寡人に告げしめず。行李
行人いま人おほむね（行装を以て行李となす。これ非なり。
鳥蹟を見て字をなすことを知る。蓬転ずるを見て車を為を
知る。木の浮を見て舟を為を知る。鴟を見て柁を制し
魚を見て帆を制す。古人の制作はみな因る所あり。

漢の孝和の時南海より龍眼荔枝を献ず。十里ゝ一置馬つぎの所あり五里ゝ一候陣屋の如き駅馬ちゝ夜傳送して死るもの有るゝ至る時ゝ唐羌上書ゝ〳〵いまゝ二物殿ゝ升るいまゝ必ず〳〵年を延壽を益ゝはゝぶ。請此を罷ゝ謝承後漢書ゝ則荔枝を献ずる由来まゝに久し。一騎の江塵妃子笑しらゝ語なるゝ。これより先漢宮ゝとはゝ事あらん。

柳子厚國語を法ゝして文章をはゝりゝく。集中国語を非とするの論なり。蘇子瞻嶺外ゝはゝり特ゝ子厚の

交を陶の詩柳文此を南遷の二友とゝ。喜び北帰するゝ及ぶゝ人ゝ書を與へゝ痛ゝく子厚を話る。時令斷刑四維貞符の諸篇。陰ゝ用ひて陽ゝ此を非とす。恐らゝく英雄人を欺くゝあるべ。

庚鳥ゝ雄ゝ大ゝ雌ゝ小なり。惟鸞鳥ゝ雄小雌大なり。人類ゝ只小なる者精悍多し。

鳥ゝ雌雄を知らんと欲するゝ翼を以ゝ此を辨ず。翼右左を掩ゝ雄あり左を右を掩ゝ雌あり。

昔ゝ日南ゝ象を貢ず。一雄九真ゝ死ず。雌あるゝ土を掘り身小著ゝ。喪服のぎ莖艸を飲食せざるゝ象ゝ子

の皮を見るに則泣く。物情何ぞ必ずしも人情に殊ならん。

穀の葉に巣くふ鳥此を翼と。詩の大雅子夂の葉らくふ虎是

を乳さ左傳齊の頃公の葉らくふ。狸乳して鸇ことを

覆ふ。妾の蕭同叔子の生ことろ字を无野という。

蓂莢一名を靈莢亦仙莢と名づく。のびつるや三五にして生じ一畫。朝より望よりを日毎に一莢を生ず。

三五みして萎尽く。十六日より晦に至り日に一莢を落す。植物乃日を知るもの

あり。藕の生ずる月に應じて閏月に一節を益す。竿は十二子

を以て衛とす。月数に應じて植物の月を知ること

のあり。長春樹の花は春の色碧あり。春尽きて落つ。

夏は色紅あり。夏の末に調む秋は色白し。秋殘るに及

萎む冬は色紫あり。雪に遇へば謝して植物の時を知るものあり。

樹葉蓮の如く樹身桂の如し。燕の昭王に是を種る

水に物を載せ弱水は芥を負せるごとし。金石に沉まざる

ものなし。澄水獨り金石を沉む。沉まざる。丹人登水

を渡る者は尾鐵を以て船舫を作る。鵠は白あり。然るに丹鵠あり。周の昭王の時塗脩国丹鵠青鳳を献ず。

鷺は白あり。然るに朱鷺あり。馬は果下あるものなり。

漢の桓帝の時此を献ず。注に赤果下牛あるものなり。日南郡より出づ高さ三尺馬

よい高く果樹の下に行く。然るに亦

よい千里あるものなり。然るに千里牛なるものあり。

晉書荀晞傳〳〵千里の牛を得る。

古の善〳〵馬を相するもの寒風是麻朝管青子汝厲の屬あり。呂覽見古　みな馬の一節を以〳〵その駑良を知ることに奇なり〳〵又丹丘国の人輙ち馬鳴を聽〳〵腦色を別つ。蓋〳〵馬の腦色たゞ赤きものの最上。月ゝ行く日ゝ行事万里事千里　青嶋百里　黒水に入り毛鬣濡ぐいぞ。皆良色なり。白きものの最下多力にして駑なり。其術なんぞ。啻牝牡駑黄の外に出るのみあるんや。肉眼を具ふ者。區々たる毛色を以て馬群を別るゝぞ。丹丘国の人の爲に笑ふべきなり。

性ヲ知テ用ヲ不知可言

馬。穀を食へば足重〳〵して行くことなるぞ。雁。粟を食へば翼重ふして飛ぶことなるぞ。これ人己の養を以て此を養ふ。故にその性を失ふ。若〳〵馬を以て馬を養ひ。鳥を以て鳥を養へば則その飛走の性を遂ん。

中射の士竊に荊王不死の藥を飲み。荊王これを殺さんと欲す中射の士いまゝ〳〵藥不死を以て名づく。臣を殺さば是死藥なり。王よりて殺さんに戰国策その說辨に似たり。東方曼倩ましく此事なり。漢の武帝齋すること七日なして。君山不死の酒を得たり。朔請ふ

此を視〳〵一飲にして尽を。帝此を殺さんと欲を。朔い〳〵朔を殺して若死さばこの業験なくぞ。其験なるを以て殺さば。殺さるゝ必ず死ん。真〳〵滑稽の雄あり。

眼は身の鏡耳は體の牖。視る事多くをば鏡昏く。聴くこと多くをば精散を。營い竟をば明消を。この事衛生の經なるべし〳〵。

晋の范寧う〳〵目の痛を患ふ。張湛は就て藥方を求む。張湛是は法を授けていわく。書を讀て捐る一ツ。思慮減を二ツ。内視を專にして三ツ。外視を簡にして四ツ。且夜そ〳〵起る五ツ夜蚤く眠る六ツ。此の要を括れり。其うち内視を專ふにと言ふて是を尽せり。天隠子いわく凡人の目は終日他人を視るもく小心にして遂は外に走る。終日他人事を按ぜ故は目はまゝ外を逐て瞻る故は營〳〵浮光いまゝ嘗〳〵復照をあゝぞ。如何ぞ病ざんにはなるべし。この内視を專にすることを能せば。孝道の切半なるべ

豈ゝ〻ぞ〻ゝ目疾を療さぞ〻さのみあゝんや。○堯民按ぜるゝ内視反視ゝ聖人の道の樞要なゝ。老莊の内視とゝ頗る異あり。

冉閔ゝ朱龍を失なゝ〻ゝ擒るゝ王珣ゝ青馬を得ゝ〻貴ゝ。然ゝさいさかゝ乘ぜるゝ所の馬よゝ〻主人を禍福ゝゝる。載記ゝ冉閔乘ぜる所の赤馬を赤龍とて日ゝ行ゝ千里燕の騎是を圍ひゝ數周冉閔馬を躍ゝ圍を潰せ東ゝ奔る事二十餘里馬故ゝ〻ゝて死せ。容恪ゝ爲ゝ擒とゝゝる。○元史ゝ王珣ゝ武力人ゝ絶ゝ〻ゝ騎射を善せゝ。ゝ〻ゝ道士ゝ遇ゝ王珣ゝいゝ〻ゝ曰君の相ゝふゝ〻ゝ奇ゝ。密日一の青馬ゝ因ゝ〻ゝ貴ゝゝ。王珣いゝ〻ゝ是ゝ信ゝぞ。その後客ゝ〻ゝ青馬を以ゝ〻ゝ来て。鬻ぐ王珣ゝ喜ゝ〻ゝ曰道士の事驗ゝゝ乃ゝ倍價ゝて是を買ひ後乘ゝ〻ゝ以ゝ戰ゝその祥覽ゝ虔ゝ刀を受ゝ〻公卿とゝる王進退周旋悉ゝ〻意の如ゝ〻ゝ。

双ハ賈刀を獲ゝ〻魏の將とゝゝる。然ゝさいさかゝ佩るゝ〻ゝ

ろの刀ゝ〻ゝ主人を昌隆ゝゝる。○晉書ゝ〻ゝ呂虔佩刀ゝゝ工是ゝん此刀を服ぜゝ〻ゝ呂虔王祥ゝ〻ゝ曰ゝ〻ゝ相ゝ〻ゝ必ぜ三公ゝ登害をゝゝ。鄉ゝ公輔の量ゝゝ故ゝ〻ゝ曰ゝ〻ゝその人ゝゝ〻ゝ刀ゝゝ〻ゝ王祥覺ゝゝる。ゝ臨ゝ〻ゝ刀を以ゝ〻ゝ弟の王覽ゝ授ゝ〻ゝ後ゝ〻ゝ輿ゝ此刀にゝの〻ゝ足ゝ。王覽後ゝ是を佩ゝ江左ゝ輿る古今刀劍録ゝ〻ゝ王戎ゝ〻ゝ市中ゝて一刀を買得ゝ〻ゝ。賣者ゝ〻ゝ是を得る者ゝ貴ゝ。王戎是を佩ゝ〻ゝ魏の將とゝゝる。○元史ゝ〻ゝ王珣ゝ〻ゝ陸水の濱ゝ行ゝ〻ゝ一の古刀を得ゝ〻ゝ。その背銘ゝゝ〻ゝ峯ゝ〻ゝ克ざる事ゝゝ。動ゝ〻ゝ必ぜ功を成ゝ〻ゝ常ゝ是を佩る者。

鳴。故ゝ向所ゝゝ捷ゝ〻ゝ。

張思和の獄を斷ぜ諸の囚ゝゝ〻ゝ。扭械枷鎖ゝゝ〻ゝ人生羅刹鬼の如

と號ゝ。張思和生む所の男女みゝ肉鏁を著ゝ〻ゝ手足ゝゝ〻ゝ

亟に肉杻を著ゝ。太平廣記大業隋の年号の中に卒ゝて諸囚を

暴酷ゝ後ゝ一子を生ぜ。肩上ゝ肉枷ゝゝ〻ゝ頸ゝ〻ゝ。五行記慘

毒の報ゆるの如し。

書籍唐の以前は寫本多くして摸印少し。孝者傳録の艱なり（摸印　整行）

を習ひ見る故に、その誦讀精祥なり。宋以後は刊鏤多くして（五代の時）

馮道奏して官に請ひ六經を鏤板印して行はる。宋の寫本少し。孝者書

太宗淳化中に史記前後漢と共に有司の摹印に付す。

の得易きを習ひみて誦讀よりて粗率なり。今日おのづから一時

剖厥の濫極まるより（文字畫の訛謬をいふ）恨るべき者は刻工少くして校を略

す。尤恨るべきは藏書多くして閲るに怠る。坊間更冢の書多きに

惑ふ。架上に蠹魚の飽に供するなり。

談鋒資鋭　巻之下　終

談鋒資鋭序

昔唐劉子元著史通、呉兢稱其足傳於不朽。夫學者之弊、精而不博、博而不精、没世窮年、孳々矻々、仰屋著書、亦歸湮没、豈得傳於後世哉。荒井堯民近日著一書、目曰談鋒資鋭、其言艉艉觥觥、汪洋深博、商較古今史籍、而貫穿雑書、使

今世之學者見之驚心動魄嘆賞以爲不及也夫天下之人孰有不嗜談論者乎平居無事友朋交會栩々相誇剪韭細論閑口而笑縉紳先生之所嗜也彼里巷之兒童走卒以俚鄙之談沾々自喜道聽塗說言之者無益聞之者不中用則徒逞口角而已又有何益乎堯民

少而負逸才爲文蒐古一時騷人詞客莫不與之交游受業於先人之門不數年而其學大成確乎不可拔雄辨風生以其談鋒壓倒儒流且考証史籍論議中其窾綮元々本々得古人之要領輯爲此編實一部之史通而爲談藝家之金丹大藥焉唯惜其爲書得陳氏之儲

者爲多而稱別闢町畦自足傳於後世
世之學者一讀此編早闢其才地有益
於學問又豈小補云乎哉於是乎序

文政十二年五月中浣

武田信成撰

綿貫

国立公文書館
National Archives of Japan